

ボルネオ内陸部の交易拠点としてのロングハウス

—— 19 世紀末のサラワクにおける河川交易からの考察 ——

佐久間 香子*

The Longhouse as Trade Hub in Inland Borneo: Sarawak's Riverine Trade in the Late Nineteenth Century

SAKUMA Kyoko*

Abstract

Since the Age of Commerce, the importance of forest products from Borneo, an archipelago in Southeast Asia, has been well known. The development of Sarawak and North Borneo, independent of Labuan, was a slow process. By the early 1880s, Sarawak was outstripping its Bornean neighbors in the volume of jungle products. Many studies in the human and social sciences have examined jungle and forest products, and historians and anthropologists, in particular, have focused on this area. However, the impact of riverine trade in forest products on the hinterlands that produced the primary commodities is not clear. This paper focuses on Long Terawan, a longhouse community in the Middle Tutoh River—in northern Sarawak—which was one of the biggest indigenous riverine trade hubs of inland Borneo in the late nineteenth century. It takes an anthropological approach to explore the riverine trade in forest products that played an important role in the formation of a trade-hub longhouse and built a wide network centered on the longhouse. The analysis was conducted with the help of door-to-door interviews with villagers about lineage, migration history, myth, and subsistence, and a collection of historical data sourced mainly from the *Sarawak Gazette* in the research area.

Keywords: Sarawak, trade center, riverine trade, hinterland, longhouse, bird's nests
キーワード：サラワク、交易拠点、河川交易、後背地、ロングハウス、ツバメの巣

* 京都大学東南アジア地域研究研究所; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: skyoko39@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.54.2_153

I は じ め に

東南アジア海域世界の人類学研究において指摘できる問題点のひとつに、海域の情勢変動と陸地のローカルな状況における事象とのつながりが十分に説明出来ていないままである点が挙げられる。本稿は、港市に焦点を合わせてきた東南アジア海域世界における歴史学的アプローチの研究に対して、人類学的アプローチにもとづいて内陸部において河川交易が地域社会の形成に大きな役割を果たしていたことを、フィールド調査と歴史資料の分析に依拠し明らかにする。また並行して、村落（ロングハウス）¹⁾ を特定の民族集団に属するものとして把握するのではなく、多様な文化的背景をもつ人々が混交して集住する、雑多性の高いコミュニティとして捉える視座を提示する。

具体的には、19 世紀末のマレーシア・サラワク州北部のトゥトー川（the Tutoh River）上流域に広がる森林で採集される林産物の交易拠点であったロングハウス・コミュニティ、ロング・テラワン村（Long Terawan, 以下「LT 村」）の形成過程とその編成メカニズムを明らかにする。その際、食用ツバメの巣（*sayaa mano'*）²⁾ をはじめとする交易一次産品の交易に焦点をあて、交易と親族ネットワーク、リーダーシップ、そして生業経済の様態を描く。ツバメの巣に注目するのは、内陸部の在来民社会において、この資源は、中国製の壺や貴金属、ときに塩など、政治力と経済力を周囲に知らしめる威信財を獲得するのに重要な資源だったからである。

マレーシア・サラワク州は、1841 年、現在のサラワクの州都クチン一帯がイギリス人のジェームズ・ブルック（James Brooke）に割譲されるまでブルネイ・スルタンの領地の一部だった。1841 年から 1941 年の 100 年間、イギリス人のブルック一家による統治がつづいた後に、日本軍政期（1941～45 年）、イギリス直轄植民地支配期（British Crown Colony; 1946～63 年）を経て独立し、1963 年にサラワク、サバ、そしてシンガポール、マラヤ連邦を含めたマレーシア連邦となった。³⁾ 1 世紀にわたるブルック統治を経験したサラワクは、半島マレーシアや隣接するサバ州とは異なる歴史を歩んできた。本稿では主として、19 世紀末のボルネオ内陸部の状況を述べるが、その際、フィールド調査で得た比較的最近の時代状況も合わせて参照することで、当時の状況を多角的に描写する。それは後述するように、内陸部における林産

1) 狩猟採集民を除くボルネオの在来民のほとんどが伝統的に暮らししてきた、長大な長屋形態をした村落および村落単位のこと。現在、サバ州やカリマンタン（インドネシア）側にはほとんど残っていないが、サラワク州には約 4,500 のロングハウスが存続している [Zeppel 2006: 262]。

2) 本稿では、固有名詞を除いて、マレー語および地方諸語をイタリックで表記する。

3) 1965 年にシンガポールが脱退し、現在のマレーシアとなった。

物交易の統計的資料はなく、当時の生活は断片的にしか記録に残されていないことによる。

また、19世紀末に焦点を当てるのは、次のような理由による。1882年に調査地一帯がブルネイ・スルタンの領地からブルック王が統治するサラワク王国に割譲されたため（図1）、歴史資料上、この転換期前後に、調査地に関する記述が飛躍的に増加する。この豊富な史料からは、自分たちにとってより有益な交易相手を見定めるべく試行錯誤を繰り返し広げる在地民の実践や、新しい為政者が抱いていた期待や苦悩を読み取れる可能性が高いためである。

本研究で使用する歴史資料は、ブルック政府の定期刊行物であるサラワク官報（*Sarawak Gazette*、以下、文中では「官報」、引用時には「SG」とする）および、ブルック時代の地方行政官や探検家たちの探検記録や手記である。サラワク王国の地方行政官は「サラワク・マレー方言を学習することなしに管轄区に赴任が許されなかった」〔石川 2008: 127〕。そのため、「District Report」欄に掲載される地方行政官らによる毎月の報告内容は、人々の些細な言い争いから略奪・殺人事件、農作物の収穫量とそれに対する村人の見解（あるいは言い訳）、儀

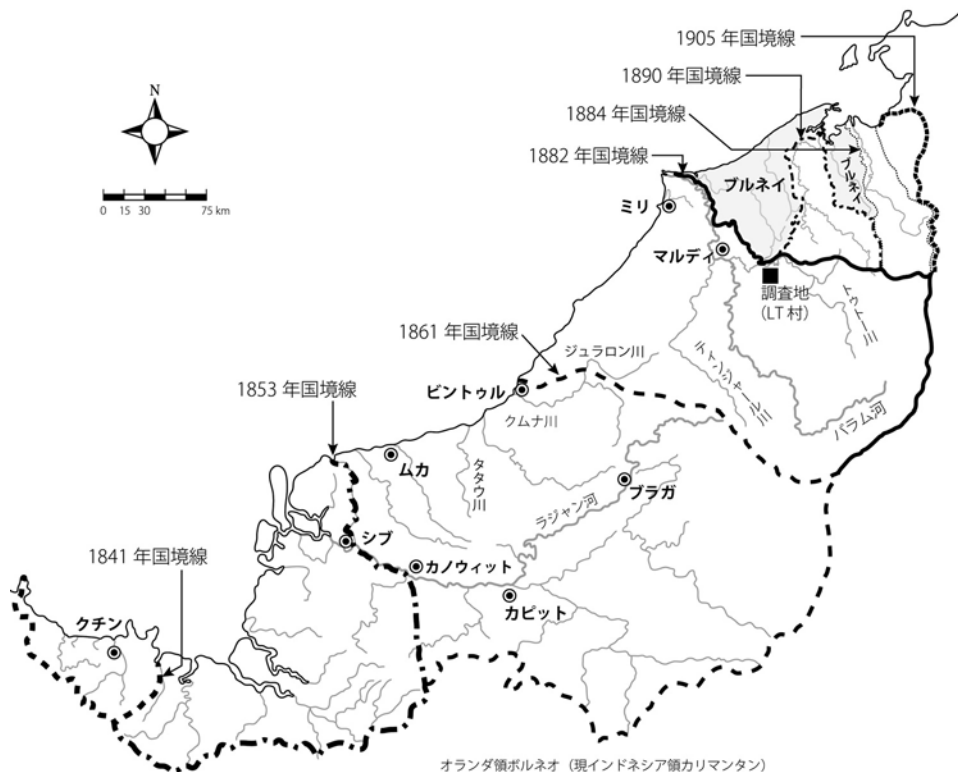


図1 サラワク王国の領土拡大過程

出所：Pringle [1970] をもとに筆者作成

礼の様子、さらには誰が誰に借金しているか、など優れた民族誌的資料として、当時の生活を現在に色鮮やかに伝えている。

フィールド調査は、サラワク州北部のトゥットー川中流域に位置するロングハウス・コミュニティ、LT 村を主として、同一河川沿いのロングハウスや遊動民のコミュニティでおこなった。調査期間は、2010 年 7 月から 2011 年 3 月までの 9 カ月間、および補足調査をおこなった 2012 年 2 月を合わせた計 10 カ月間である。内陸河川交易の最上流部に位置する調査村は歴史上、ロング・パタ村 (Long Pata; 年代不明)、ロング・ベルアン村 (Long Beruan; 20 世紀初頭から 1944 年)、旧ロング・テラワン村 (1950 年代～1963 年)、そして新ロング・テラワン村 (1970 年代以降) と名前と位置を変えながらも、トゥットー川中流域に築かれてきた (図 2)。混乱を避けるために本稿ではすべて「LT 村」の表記で統一する。

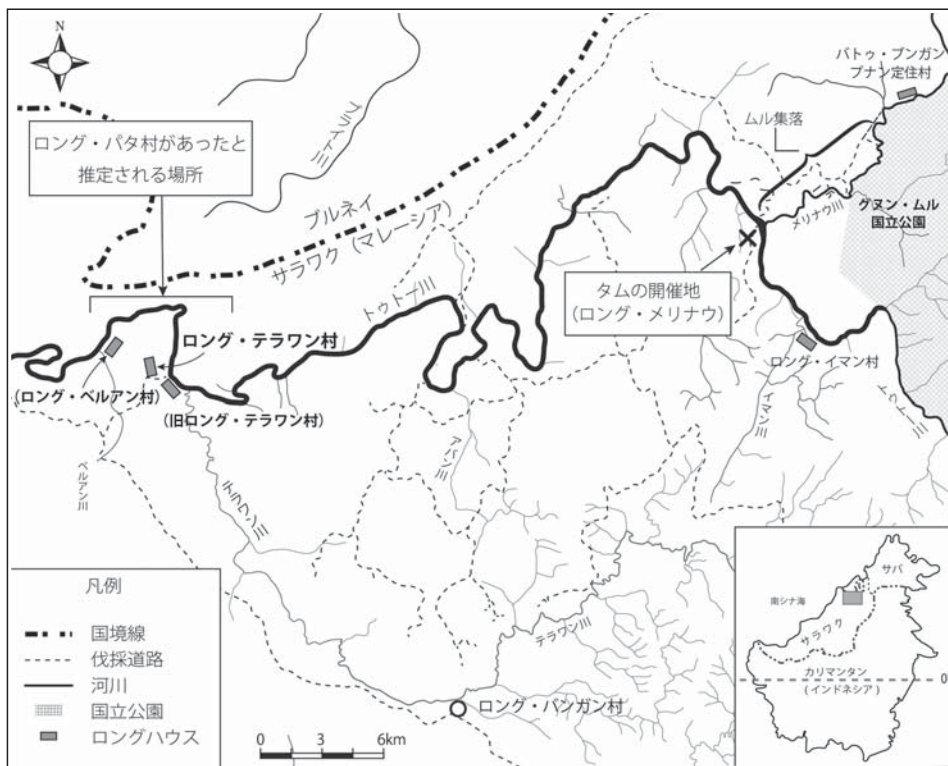


図 2 歴代の LT 村の位置と周囲の状況 (2010 年現在)

出所：筆者作成

II 先行研究の問題点と本研究の位置付け

1. 後背地と海域世界とのつながり

ボルネオは、東南アジア海域世界が「交易の時代」をむかえた18世紀以降 [Reid 1988/93]、金、錫、ダイヤモンドなどの豊富な鉱物を産出してきた。そして西洋に「発見」される以前からスルー海峡全域や大陸アジアを含む広範囲におよぶ交易圏の重要地点であった。ブルネイは香辛料貿易の中継地として発展し、ブルネイ王国の支配下にあったサラワクも、海洋交易の要所のひとつであった [Tagliacozzo 2005]。例えば、1530年のスペイン商船の記録では、「サラワク⁴⁾はダイヤモンド、樟脳、沈香などの貿易をおこなう裕福な商人たちがたくさんいた」と記録されており [Nicholl 1990: 28]、16世紀当時のマラッカに寄港したポルトガル商人の手記には、ボルネオからジャンク船（海洋交易に用いられた中国の木造帆船）に乗って来た商人の様子が記録されている [Ptak 1992: 39]。ブルネイ・スルタンに代わって、ジェームズ・ブルックが白人王としてサラワク王国を治めるようになって以降も、海洋交易における一次産品は主要な国家歳入源であり続けた。⁵⁾

しかしながら、これまでのサラワクを舞台にした民族誌で描かれてきた歴史は、ブルック以降のボルネオ島内の閉じた世界の中での分析に限定されてきたことにより、東南アジア海域世界との交易をとおしたつながりは歴史研究の仕事とするディシプリン・ベースの分業体制によってほとんど考慮されてこなかった。またその多くが、「背景」としての歴史描写にすぎなかった。この意味で、内陸と海域をつなぐ歴史動態の実証的研究はほとんどなされてこなかった。

それに対して本稿では、内陸と海域、あるいは港市と後背地をつなぐ歴史動態の実証的研究の試みの発端としておそらくは最良といえる河川交易に注目する。その際、サラワクとブルネイなどの王国間の関係、さらにはツバメの巣の消費地である中華世界との関係を含んだ歴史空間をマクロな空間と設定して議論を展開する。すなわち、LT村の編成過程は、ボルネオ内陸部のロングハウス・コミュニティと海域世界との連動の様態に定位することでしか提示しえない歴史状況だということである。

交易活動は、とりわけ歴史研究において重要な分析対象であった。貿易を東南アジアの歴史

4) 当時のスペイン語文献では、サラワクは「Cerava」と書かれている [cf. Nicholl 1990; Ptak 1992]。

5) 例えば、19世紀のサラワクから産出されたサゴは、世界に流通した量の半分を占めていた [Baring-Gould and Bampfylde 1909: 213]。また、ラジャン河 (the Rajang River) の河口域ではすでに商業目的の木材伐採業 (以下、商業伐採) が操業され、1870年代にはボルネオテツボクが広東系華人によって下流域のカノウィット (Kanowit; 図1) から香港と中国広東省に向けて輸出されていた [Ik 2011: 9]。

に関連付けて包括的に考察した代表的研究として、ファン・リユール [Van Leur 1955] やウォルターズ [Wolters 1982]、また、東南アジアの河川交易モデルを提示した考古学者ブロンソンの研究 [Bronson 1977] が挙げられよう。しかし、海域と内陸、港市と後背地の関係を扱った研究は、歴史学からも人類学からもほとんど出てきていない。⁶⁾ つまり、交易（貿易）の研究が港市で完結してしまい、交易が内陸に広がる後背地にどのような影響をもたらしたのか、後背地は港市やそれを統治する者とどういった付き合い方をしてきたのか、これらを実証的に明らかにした研究は依然として少ない現状がある。⁷⁾

交易活動の実証的研究が少ない理由のひとつは、港市とは異なり、後背地社会に言及した歴史資料は、宣教師や探検家の記録などに限られており、それらも、港市の交易記録のような統計的・体系的データを提供してくれるわけではないことが挙げられる。その補完のためにフィールド調査をともなう実証的研究をおこなっても、現在の視点で知りうる過去の残存物や口承伝承から、歴史的状況に関する情報を得ることが極めて困難である。

しかし、人類学においてこの困難への挑戦や努力が放棄されてきたわけでは決してない。東南アジア島嶼部では、スハウテン [Schouten 1998] が交易によって民族間対立が激化したスラウェシ島北部のミナハサの社会変容を実証的に描きだし、また、マクウィリアム [McWilliam 2002] は白檀交易の利潤によって発展したティモール島ナブアサ首長国を扱った優れた民族誌を公刊した。他にも、歴史家ワーレンは 1768 年から 1898 年のスルーからセレベス海域を対象に、西欧列強だけではなく中国との関係を含めて分析し、海域での貿易（奴隷を含む）と海賊行為がいかに内陸部社会のエスニシティや文化形成に影響を与えてきたのかを詳述している [Warren [1981]2007]。

ボルネオに視線を転じると、カリマンタン側（インドネシア）ではヨーロッパがこの海域に進出する以前の林産物交易を東カリマンタンで検証したペルソーの研究 [Peluso 1983] や林産物の商品連鎖に注目した論集 [Nevins and Peluso 2008]、中央カリマンタンにおいてダイアモンド鉱山が発見されたという噂が巻き起こす、資源交易をめぐる多様なアクター間の関係とその歴史的背景を描いたツインの著作 [Tsing 1993] など、それぞれに独特の切り口を持ったいくつかの研究が認められる。また、1600 年から 1880 年のバリト川流域を中心とするボルネ

6) ただし、近年の歴史研究において太田 [2014] や Mizushima *et al.* [2014] のような海域と内陸が直接つながった地域を対象にした研究が出てきていることは、注目すべき研究動向である。また、考古遺跡から民族誌まで幅広いデータを渉猟して、ボルネオを含むセレベス海域を対象に約 4 万年前から現在までの人類の生存の営為を紐解く小野の研究は、これまでの研究枠組みを超えた新しい方法論を提示する意欲的な研究である [小野 2011]。

7) 例えば、これまで海と港市に考察の対象が絞られてきた交易研究に対して、大木の研究 [大木 1981] は河川交通をより広く内陸交通として捉えて、スマトラ中・南部における内陸交通の担い手に焦点をあてて論じている。

オ南東地域を対象に、在地民による林産物交易を含めた森林利用と彼らの生業経済・儀礼・家族構成などの生活の変遷から、熱帯雨林の環境の変化を分析したクナーペンの研究は、歴史研究における港市分析以外のアリーナを提示している [Knapen 2001]。

他方で、サラワクを対象とする人類学においては、交易は研究対象地域における重要な生業経済活動のひとつであることは認めつつも、交易が対象社会の周辺地域との関係や、国家やグローバルな海域世界と関連付けて分析されることはなかった。こうした中で公刊されたルソーによるカヤン人を中心とする中央ボルネオ諸社会の人類学的研究 [Rousseau 1990] は、次の点においてサラワクにおける人類学研究に影響力を持った。何よりも同書は、「流域社会」(basin society) という概念を導入して林産物交易を在来民の重要な経済活動として分析することで、交易が階層社会を形成するだけではなく社会内部の序列 (precedence) を永続的に再生産するしくみとして説明すると同時に、⁸⁾ 個々の地域社会相互間の影響関係を初めて提示したという点で意義が認められる。水系を基盤に連続性を帯びる個々別々の村落群を「流域社会」というひとつのまとまりとする空間の切り取り方は、地域社会が交易を媒介に周辺社会とのインタラクティブな経済関係を構築してきたことを論じるのに適していた [e. g. Sercombe and Sellato 2007; Metcalf 2010]。

しかし、こうした地域を切り取ってその内部構造を詳細に分析したルソーの研究は、次の2点において不都合が生じる。1点目は、「流域社会」という地続きの地域設定では、国家をまたいだ人やモノの移動の動態を捉えられない点である。すなわち、ある「流域社会」の範囲内で濃度の高い諸関係を抽出することはできるが、換言すれば考察はその範囲内にとどまらざるをえず、範囲外に伸びる諸関係をすべて切り落とした地域像が強調されことになる。だが、人やモノや情報は地続きの移動による面的な移動だけではなく、海も国境も超えた飛び地と飛び地の間でつながり、行き交っている例は枚挙に暇がなく、それは何も近年のグローバリゼーションの時代に限った話ではない。

2点目は、彼の議論は最終的には、「流域」およびその範囲内で生活する「カヤン人社会」像を導き出しているという点で、「カヤン人社会」という、民族ラベルに依拠した分析枠組みをさらに補強することにほかならない [cf. Rousseau 1998]。つまり、このような本質主義的理解に基づく在来民社会像が捨象してきたのは、交易や交易を通じた海とのつながりが地域社会編成の基盤にあったという歴史状況であり、さらには現況の理解における歴史の位置付けの考察である。

8) 「序列」の概念について詳しくは、フォックスらを中心として1980年代から1990年代にかけておこなわれたオーストロネシア語族諸社会の比較研究 [Fox and Sather 1996; Vischer 2009] を、また、土地をめぐる先住／後住に限定されない「序列」については杉島 [2014] を参照されたい。

2. 本研究の位置付け

ボルネオ内陸部という人口密度が低い地域に暮らす人々の社会であっても、リーダーの台頭と衰退、あるいは首長制社会の編成は、決して流域社会内の近隣村落や覇権的立場にあった王国との関係のみに規定されるものではなかったはずである。むしろ本稿では、外界の需要が河川交易を刺激し、内陸部の地方勢力の形成を後押ししてきたという歴史状況の一端に注目する。そしてその際、島嶼部の小社会と海洋交易は共に考察されるべき歴史事象であるというのが本稿の基本的な論点である。

大小様々の河川が縦横に流れるサラワクにおいて、河川は在来民にとって決定的に重要な交通路であり、周辺の小社会を結ぶ主要経路であり続けてきた。現在のように、陸路や空路が最上流域にまで到達していなかった時代における、河川交通の重要性はなおさらである。この河川が、交易港、それを基軸に発展した港市、そして後背地を結ぶと同時に同一水系における緩やかな連帯の形成に寄与していたことは疑いようがない。

だが、この沿岸と内陸の関係を考古学者ブロンソンが示した東南アジアの河川交易モデルのように [Bronson 1977], リニアな上下運動として理解することは正しくない。なぜなら本稿の舞台のように、内陸部の交易・物流拠点を中心とする後背地社会は1本の線で描けるような、特定の港市によって末端まで統制されていた状態だったわけではなく、常にいくつかの港市や異なるルートで行商をおこなう商人たちとの間にネットワークが張り巡らされていたからである。そして、後背地社会は必要とあらば、港市や為政者に対して政治経済力を行使して交渉や抵抗もしてきたのである。

本稿が当時の後背地の交易・物流拠点が政治経済力を有していた状況を前提に論を進めるには、さらに若干の説明が必要であろう。

海洋交易は、常に港市だけではなく一次産品を産出する後背地社会も刺激してきたことは、ボルネオ各地の王権および後背地の地方勢力の衰勢の歴史が物語っている。ボルネオ島インドネシア領東カリマンタン州のアポ・カヤン地域 (Apo Kayan)⁹⁾ ではかつて、交易を中心に権力と財力を築きあげた地方勢力の首長は、「王」(*raja*) を名乗り、歴史上、幾度も生成と消滅を繰り返してきた「小王国」(*kerajaan kecil*) を統治してきた。¹⁰⁾

9) あるいは、「Apau Kayan」とも表記される。*apau* は「上、あるいは上方向」または「高地」を意味するカヤン語である。

10) 例えば、ヒンドゥー的要素の強い王権の影響がみられるクタイ王国 (Kutai Sultanate) や、スルー海域からのサマ人奴隷の輸出先のひとつだったブルンガン (Bulungan) などの小王国が台頭してきたことが知られている [Sellato 2001]。クタイ王国の歳入源は、林産物の交易と沿岸部までの輸送業によるものであった。クタイ王国のスルタンは、内陸部のダヤック人に林産物採集の賦役と徴税役を担わせる一方で、その林産物はマッカッサル海峡を支配していたブギス人トレーダーに売却することで国家歳入を増大させ経済基盤を築いていた [Magenda 2010: 12-13]。

他方ブルネイ王国の支配下にあったサラワクには、歴史上、小王国に類する王権は16世紀末期に勃興したサンバス王朝(Sambas Dynasty)以外に存在しない[Larsen 2012]。政治的、経済的に突出した地方勢力は、「有力なロングハウス」としてロングハウスの名や、「オラン・カヤ」(*Orang Kaya*)や「トゥモンゴン」(*Temenggong*)などいったマレー貴族の称号(*ensumber*)を持った首長の名が官報に記録されてきた。オラン・カヤとは、マレー人社会および、「ダヤック」(*Dayak*)と総称されてきたボルネオ在来民社会における「在地の長」であり、有用資源の生産性の高い生態環境、あるいは戦闘や海賊行為などの功績を基に台頭した地域社会のリーダーである。また、トゥモンゴンとは、本来はマレー人村落の慣習をブルック政府が導入した間接統治システムにおける最上位の「大首長」にあたる。¹¹⁾ 1880年代以降の官報にはすでに、トゥモンゴンやオラン・カヤのどちらか、あるいは両方を連ねた称号(*Orang Kaya [O.K.] Temenggong* など)を冠したLT村の首長の名前が記録されている[e.g. SG 1882/12/1; 1884/7/1; 1885/11/2]。筆者がおこなった系譜調査でも、LT村から大首長をはじめとする首長が輩出され続けていることが示された(V章の図5を参照)。

人類学者メトカーフは、このような河川交易を媒介として強大化した地方勢力としてのロングハウスを「メガ・コミュニティ」と呼び、その首長を「最高経営責任者」(CEO)にたとえた[Metcalfe 2010: 317-318]。ロングハウスが特定のエスニシティに還元しえない「コミュニティ」であることに疑いの余地はない。だが、「最高経営責任者」という比喻からは、「在地の長」としての交易拠点ロングハウスは、周囲の集団に対する経済的優位性に加えて、彼らを庇護下におき、商人やサラワク王国などと交渉する政治的リーダーでもあったことが看過されている。

「在地の長」は同時に、為政者との関係においては配下の諸集団を含めた在地の人々の代表として意見のとりまとめや徴税等を担う間接統治の一部を成していた。徴税役としての「在地の長」はLT村だけに限らず、サラワク王国の各地区の報告書においてその存在が官報の中で確認できる。「在地の長」が在地民社会を束ねる役割を担っていたことは、例えば、LT村が度々、疫病や他集団からの襲撃により村を追われた人々を受け入れていたことや、それがブルック王からの要請であったことが官報に記録されている。¹²⁾ このことが示唆するのは、LT村が内陸部社会からも、サラワク王国政府からも「在地の長」として認識されていたというこ

11) その下位には統治範囲ごとに次のような首長が存在する。統治範囲が最も小さいのはロングハウスや村落ごとに行政首長である「ケトゥア・カウム」(*Ketua Kaum*)や「ケトゥア・カンボン」(*Ketua Kampong*)、10~15ほどのロングハウスを統括するのが「ブンフル」(*Penghulu*)であり、それをさらに統括する「プマンチャ」(*Pemanca*)がある。

12) バラム河流域がサラワク王国に併合されて間もない1885年9月1日の官報には、LT村の配下にあったロング・ルカン村(Long Lukan)の村人70人がマラリアで死亡し、生き残った人々はLT村に統合されたと記されている[SG 1885/9/1: 83]。

とであり、議論はこの認識を前提に展開するべきだということである。

III 後背地の交易拠点を編成する諸条件

1. 2つの分水嶺とツバメの巣の特性

まず、LT 村の立地が2つの分水嶺が交差する点であることを確認したい。ひとつは、この場所がブライト川 (the Belait River; ブルネイ王国領) とトゥトー川 (サラワク王国領) という異なる政体を流れる河川の最接近地点であることである。歴代の LT 村のロングハウスが位置するトゥトー川は、ブルック政府の統治下におかれる以前から、「ブルネイとバラム河上流域を結ぶ交易のハイウェイ」[Metcalf 2010: 124] の拠点として重要な位置を占め続けてきた。地図 (図 2) に示した通り、LT 村の前身のロングハウスは何度か再建されるが、いずれも現存する LT 村の位置から数百メートル以内の範囲でしか移動していない。¹³⁾

ブライト川が流れつく先は、南シナ海に面するブルネイの主要交易港のクアラ・ブライト (Kuala Belait) やスリア (Seria) である。また、このブルネイ川の港市のすぐ南を走る国境線を挟んでサラワク側の交易港クアラ・バラム (Kuala Baram), すなわち、バラム河の河口がある。つまり、この2つの川の最接近地点にロングハウスを構える利点は、どちらの河川を利用して主要交易港にアクセスが可能である点であろう。さらに歴代の LT 村の立地は、IV 章で述べるような、LT 村が港市を選択することができた可能性を示唆している。

次に指摘するのは、この場所がトゥトー川をボートの航行可能域とそれ以外とに分けている境界だという点である。メトカーフが記しているように、トゥトー川を遡上する際、LT 村の辺りまでは比較的容易にたどり着くことができるが、それより上流は行く手を遮る急流が待ち受けている。そのため、その航行には十分な川の水深に加えて、熟練の技と経験をもった船頭が必要である [Metcalf 1974: 29; 2010: 156]。つまり、V 章に詳しく見るように、河川のより上流の人々、あるいはカリマンタン側から陸路を使ってやって来る人々にとって、河川が物資や人の移動手段として意味をなしうる分水嶺に、歴代の LT 村はロングハウスを構え続けてきたのである。歴代の LT 村がこの2つの境界が交差する場所にロングハウスを構えてきた理由は、河川が人とモノの主要移動手段であることに鑑みれば了解できよう。

上記の立地条件は村人の生業選択にも少なからず影響してきた。以下では、外部世界の需要の高まりが後背地の地域社会編成に大きく影響を与えた資源として、本稿でツバメの巣を取り上げる背景を説明する。

13) 歴代のロングハウスの位置は、村人に案内してもらい GPS で位置情報を収集した。ただし、ロング・パタ村の位置に関する情報は曖昧であり、官報から読み取れる情報を主として位置を推定した。

海洋貿易においてツバメの巣が商品として価値をもつのは18世紀後半以降のことであり、交易一次産品の中では比較的新しい資源である [Blussé 1991: 321; Chiang 2011: 409-410; Ismail 1999: 3; 篠田 1970: 167-171]。清王朝時代に入ること、食用ツバメの巣の需要は宮廷外に飛躍的に拡大する [篠田 1970: 168]。以来、大陸の有力者のあいだにも広まったツバメの巣は、配下にある者にとっては君主への貢物として、受け取るものにとっては富と権力を手にする者だけに許された贅沢品として、中華世界における威信を誇示する象徴的な資源という点で、香辛料など他の交易一次産品とは異なる特徴を鮮明にしていくことになる。

さらに、東南アジア島嶼部においてツバメの巣が他の一次産品と一線を画するのは、その価格が上昇し続けてきたという点である [Cleary 1996: 306] (図3, 4)。その理由は、ツバメの巣には、人間の生命力の向上(健康や長寿など)に対する特殊な薬効が期待されていたことと、消費者層の拡大に支えられた需要の増大が挙げられる。他方で、その採集のためには、石灰岩

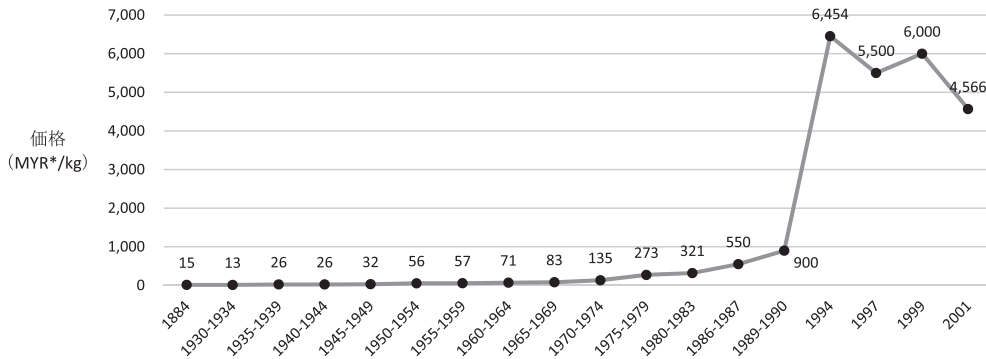


図3 未加工ツバメの巣(黒)の平均取引価格(MYR/kg)の変動

出所：Lim and Earl of Cranbrook [2002], Hobbs [2004] をもとに筆者作成

注：*MYR=マレーシアリングギット (Malaysia Ringgit)

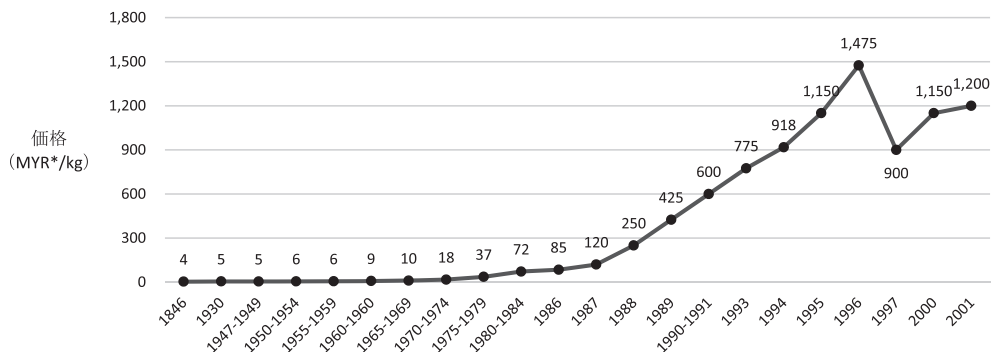


図4 未加工ツバメの巣(白)の平均取引価格(MYR/kg)の変動

出所：Lim and Earl of Cranbrook [2002], Hobbs [2004] をもとに筆者作成

注：*MYR=マレーシアリングギット (Malaysia Ringgit)

地質の切り立った岩肌を登らなければならないという、困難さと危険さによって供給量は限定されていた。このように、供給が需要に追いつかない状態が続いたため、価格は上昇の一途をたどったのである。¹⁴⁾

サラワクでも高額で取引される商品としてのツバメの巣の採集と交易は、ブルック統治によるサラワク王国誕生期にはすでにおこなわれていた [J. Brooke 1838: 443]。他方、LT 村が採集活動をおこなってきたムル (Mulu) の洞窟¹⁵⁾では、ブルック家の統治下におかれた後に採集と交易が始まったようである。1884 年の官報の「バラム地区レポート (Baram District Report)」に、次のような記述がある。

トゥトー川のオラン・カヤ・トゥメンゴン (Orang Kaya Tumanggong [sic.]) は、300 人のアダン・ムルット人 (Adang Muruts) からアダン人 (Adang [?]) やブラビット人 (Belabets [Kelabit?]) たちの戦争が続くリンバンを離れて、サラワク王国の庇護下で平和に楽しく暮らすことを願っていると相談を受けたことを、私 [バラム地区行政官] に知らせにきました。私はこのオラン・カヤと長い時間をかけて話し合い、そこでこの国 [サラワク王国] の内陸部の様子について実にたくさんの情報を得ることができました。まず、トゥトー川上流域にあるムル一帯にはツバメの巣が豊富な洞窟があることは間違いないようで、トゥトー川とその周辺地域は、ゆくゆくは重要なコンセッションの一部となるでしょう。[SG 1884/6/2: 55-56] ([] 内は筆者による補足。以下同様)

この行政官が書き記した通り、LT 村は河川交易に最良の立地に加えて、ツバメの巣という交易品を自ら採集することで、トゥトー流域の在地民社会におけるリーダーとして発展していった。次節以降、ツバメの巣の採集地と内陸部交易拠点を支配下に治めていたロングハウス、LT 村に焦点をあて、19 世紀以降のサラワク王国の河川交易がいかに内陸部社会を編成してきたかを検証する。

2. 「根幹の人々」としての「在地の長」

前章に指摘したとおり、内陸部の「有力なロングハウス」首長にはオラン・カヤやトゥモンゴンなどのマレー貴族の称号を持つ者がおり、彼らはブルック政府統治期には間接統治システ

14) 2000 年代に入ってから、サラワク州各地でツバメの巣の養殖事業が急速に拡大して、供給量が増大した。だが、筆者がクチン市内のツバメの巣の販売店で確認したところ、店頭にならぶパッケージ化されたツバメの巣は、洞窟で採集されたツバメの巣と養殖は区別されておらず、市場に占める養殖ツバメの巣の占める割合は不明である。

15) 洞窟群および周囲の原生林一帯は、1974 年にグヌン・ムル国立公園 (Gunung Mulu National Park) に指定され、2000 年には世界自然遺産リストに登録された。位置は図 2 を参照のこと。

ムに組み込まれていた。その一方で、在地民社会においては、後住者に対する先住者の土地に対する優位性を確認するターミノロジーがある。

それが「根、根源、根幹」(*puqn*) の概念とそれを用いた比喻表現である。LT 村はバトゥ・ベラ村 (Batu Belah) とともに、トゥトー川の「根幹」、つまり先住者であることを他の先住者集団と移動史を共有し語り継ぐことで、先住者としての正統性を保持してきた。なぜならバラム河流域において、長大な系譜や移住史に関する知識に依拠して自分たちを「根幹の人々」として主張し、また周囲からもそのように理解されることは、後住者集団に対して自らの優位性を示す最も重要な根拠となるからである [Hose and McDougall 1912: Vol. II, 138; Metcalf 1976: 89; Rousseau 1998: 171, 184]。

現在、「ブラワン人」(Berawan)¹⁶⁾ のロングハウスとして登録¹⁷⁾されているロングハウスは、トゥトー川流域にある LT 村とバトゥ・ベラ村、そしてティンジャール川流域に建つロング・ジェガン村 (Long Jegan)、ロング・テル村 (Long Teru)、そこから分離したロアガン・ブヌツ村 (Loagan Bunut) であり、次のような移動史を共有している。移動史における起源の地は、アボ・カヤンである。その後、ウスン・アパウ (Usun Apau) を経由してバラム河の本流や支流に拡散していった人々がこの5つの村の始祖なのである。

トゥトー川では、起源の地からトゥトー川流域に移動して「最初の住人」となったのが、後に LT 村の一員となるトリン村 (Tring),¹⁸⁾ LT 村、ロング・キプット村 (Long Kiput)、そしてバトゥ・ベラ村の人々であり、これらの村および村の人々は「ルポ・プウン」(*lepo pu'un*) と呼ばれていた [Metcalf 1974: 31]。「ルポ」(*lepo*) はロングハウスか戸建にかかわらず人々が集住しているところ、あるいは集住する人々を集合的に指す単語であり、「プウン」(*pu'un*) は「樹木の根」あるいは「所有すること」¹⁹⁾ を意味する。バラム河流域の在来民社会

16) 「ブラワン」という民族呼称は、村人によるとマレー語の *melawan* (「敵対する、争う」の意) という動詞が訛ったものとされ、まだバラム河流域一帯がブルネイ・スルタンの統治下にあった頃、他集団の村々を次々と首を狩りながら襲っては勢力を拡大していた「ブラワン」の祖先たちが、「手に負えない暴れ者」という意味でこのように呼ばれたと説明される。

17) サラワクでは、ロングハウスを住民局に登録する際は、民族名を同時に記載することが義務付けられている。ロングハウスの民族名はミリ市の住民局で確認した。

18) 史料で「トリン」は、(民族) 集団の呼称としての「トリン人」を指すが、彼らのロングハウス名としても使用されている。本稿では、この名詞が使われる文脈に応じて「トリン人」あるいは「トリン村」と表記する。また、「トリン」の表記にはいくつかのバリエーションがあるが (「Treng」「Trieng」など)、本稿では史料上、最も多く用いられている「Tring」を用いる。トゥトー川の「トリン村」は、東カリマンタンから奇襲攻撃を仕掛けてきたカヤン人戦闘団に追われ、生き残った者のほとんどが LT 村の庇護下に入っており [Metcalf 1976; Blust 1984]、現在のサラワクではトリン人およびトリン人の村というのは公式な人口統計上、存在しない。

19) メトカーフは *pu'un* の「所有する」という意味について、彼が調査した 1970 年代のロング・テル村で話されているブラワン語における *puwong* と同義だと説明している [Metcalf 1982: 58]。だがおそらく、この単語は日常的に使用されていたわけではなく、ごく稀な特殊な状況においてしか使用されることはなかったと考えられる。なぜなら、筆者の調査経験上、人やモノに対して「～のモノ

においてルポ・プウンは「根幹の人々」という意味で理解されている [ibid.: 31, 37]。つまり、これら4つの村すべてがトゥトー河流域の「根幹」であり、先住者なのである。

「在地の長」(*Orang Kaya*) などマレー貴族の称号を持った首長と、その土地の「根幹の人々」は、それぞれ異なる規範にのっとりたリーダーである。だが、バラム河流域では、²⁰⁾ LT村以外の「根幹」のロングハウスもサラワク王国政府にとって、統治の上で無視できない地方勢力だった。²¹⁾ そのため、「在地の長」を有する有力なロングハウスは、「根幹の人々」のロングハウスと符合する。そこで次に、ロングハウス内における先住者集団と後住者集団との関係を、社会的序列関係から整理しておきたい。

バラム河流域を含む中央ボルネオ在来民社会において、「根幹の人々」と呼ばれた村の内部にも起源とのつながりに依拠した社会的な序列関係が、世代を超えて再生産されてきたことが知られている。例えば、ルソーが調査したバルイ地域のカヤン人社会においては儀礼的階層と社会的階層が並存しており、中でも社会的階層は貴族層を指す「マレン」(*maren*)、平民層の「ヒプイ」(*hipuy*)、そして「ピンン」(*pinyn*) と「ディベン」(*dipen*) の2段階の奴隷層に分類することができる [Rousseau 1979: 217]。しかし、筆者が調査したLT村では、指導者の立場にある年長者のみが知っているにすぎない、有名無実化した社会的序列を示す用語だけが残っている状態である。

これに対する住民らの説明には2種類が聞かれる。ひとつは、社会的に尊敬されるべき人々に対しては「ティンガラ」(*tinggalan*)、それ以外の人々には「パニヤン」(*panyan*) という用語が適用されるというものである。もう一方の説明によると、ブルック統治下のころにはLT村の祖先の間にもカヤン社会のような階層があり、貴族層は「マラン」(*malan*) といい、それに属さない下位層の人々を総称して「パニヤン」と呼んだという。本稿では、いずれの説明においても、一部の特権的立場にある人々とそれ以外の人々という二層構造がみられる点に注目したい。

後者の説明において支配階層である貴族層の「マラン」は、カヤン語の「マレン」に対応し

ノ」という直接所有を表現することは極力避けられ、*kolo* (「～が好き」の意) という単語を用いて回りくどく表現されているからである。筆者が調査したLT村およびムル集落においては、例えば、*Akko kolo ubi* は直訳すると「私はご飯が好き」だが、会話の文脈によっては「これは私のご飯だ」という意味を持つ。後者の場合、「(炊いた) ご飯」を表す *ubi* の後に *toh* (「これ」の意) などの代名詞を併用される。

20) その他の地域における「根幹」とリーダーシップについては、西島のまとめが参考になる [西島 2015]。

21) ロング・ジェガン村はビントゥル河流域とバラム河流域の分水嶺に位置し、ロング・キブット村はトゥトー川とバラム河の合流地点に位置している。また、ロング・テル村の多くの支持者を従えた反逆的指導者はブルック政府を大いに手こずらせた [Metcalf 1992]。そして、トゥトー川とティンジャール川の間に位置するパトゥ・ベラ村は、双方のロングハウスの首長層との親密な親族関係を結んでいた。

ている。そして、それより下位の「パニャン」はおそらくカヤン語で奴隷層のひとつを示す「ピニン」と同じ語源だと考えられる。だが、貴族層、あるいは支配者層以外のすべてが奴隷層であったとは考えられず、実際には平民層という位置づけで生活していたと考える方が実態に近いであろう。なぜなら、後にLT村の庇護下に取り込まれたトリン人が、それ以前は「根幹の人々」のリーダーであったことを考えると、彼らをぞんざいに奴隷として扱うことは、土地神の怒りを買うことに等しい行為であるために、極力避けられたはずだからである。東南アジア島嶼部の民族誌を紐解けば、むしろ、土地の先住者の女性と婚姻関係を結んだり、先住者の首長やその親族をより高次元の外來王として招請したりして、後住者集団と土地とのつながりを正統化しようとした例が圧倒的に多いのである。²²⁾

以上に鑑みれば、LT村ではトリン村との系譜をつないで継承してきた一部の人々がLT村の「根幹」として首長層に位置している。他方、「パニャン」は即座にカヤン語の「奴隷」と同義として理解されるべきではなく、首長層以外の、LT村の人々と混交し集住していた「大多数の雑多人々」であり、後住者集団である。LT村はこの雑多人々と系譜知識を有する首長層が創りあげた社会空間なのである。

IV 交易拠点の風景

1. ツバメの巣の採集活動

洞窟は、森とは違う動物由来の生態資源を人々に提供してきた。²³⁾ なかでもムルの洞窟群が村人に提供するもっとも重要な資源は、食用ツバメの巣であった。しかし、ツバメの巣の採集には、洞窟にたどり着くまでの河川の航行と洞窟内での採集活動という二重の困難と向き合わなければならない。本節では、口承史をもとに人々がこの困難にいかに向き合ってきたのかを、生業全体におけるツバメの巣の採集を位置づけながら描写する。

ツバメの巣は、アナツバメが洞窟の上部の壁に造るもので、年に2~3回程度の頻度で営巣と産卵がおこなわれるため、恒常的に採集可能な資源である。だが、LT村の人々が続けてき

22) たとえば、サラワクでは Pringle [1970], Walker [2002], King [1993], 東南アジア島嶼部の他の地域では McWilliam [2002], 富沢 [2003] などがある。

23) 例えば、洞窟に群棲するコウモリたちが落とす糞（グアノ guano）から滲み出る塩分は、塩場を形成しスイロク（シカ）などの動物たちを引き寄せ、人々に格好の狩猟の場として利用されていた。一般的にグアノとは、海鳥の死骸や糞などが長い年月をかけて堆積し化石化したものである。そのため、本論文でいうグアノとは、正確にはこのような海鳥由来のものとは区別され、「バット・グアノ（bat guano）」と呼ばれるものである。これは、洞窟内に生息するコウモリの糞や体毛、そして洞窟内の生物の死骸が堆積したものであり、古くから菜園の肥料として利用されてきた。以上のグアノの説明は、考古学的研究にもとづいた論文 [Shahack-Gross *et al.* 2004] を参考にした。聞き取りによるとムルの洞窟のグアノは、下流域の華人が好んで果樹園の肥料として使用する、河川交易の商品であった。

たツバメの巣の採集活動は、気象条件と陸稲栽培との兼ね合いでその時期が制限されてきた。

これは官報の報告とも一致する。1935 年 7 月、当時、第 4 省 (The Fourth Division; 現在のビントゥル省とミリ省を含む範囲) の土地測量局 (Department of Land and Survey)²⁴⁾ における最高責任者であったリーチ (D. L. Leach) 率いる大規模測量を目的としたムル山への登頂が、サラワク博物館との共同調査探検としておこなわれた。ボルネオの中でもこの地域は年間を通して降雨量が多いことが知られているが、石灰岩地質のために土壤の保水機能が低い [Osmaston and Sweeting 1982: 82-83]。それゆえ、官報に記されたリーチの探検記にあるように、普段のこの辺りの水位は低く、LT 村やそれよりも上流まで行くことができるのは水位が上がった限られた時期だという。そのため、リーチ一行は川の水位が上がるまで LT 村に 2 日間の足止めを余儀なくされたことが記されている [SG 1983/4/1: 8-9]。

加えて、地図 (図 2) が示すように、歴代の LT 村のロングハウスの立地と採集場所の洞窟群の間には、河川距離にして約 30 キロメートルもの隔たりがある。そのため、洞窟内での採集作業には、優秀な船頭と採集者としてまとまった人数の男性の労働力が不可欠である。だが、労働力の必要な陸稲のための森林伐開と播種 (5~6 月)、収穫 (1~2 月) は、遊動民など LT 村の村民以外の労働力も必要とする繁忙期であるため、洞窟への採集活動や狩猟キャンプよりも農耕を最優先として、可食林産物の採集や狩猟を並行するという生業バランスとなる。すなわち、ムル地域の気象条件と多生業状況において、数週間~数カ月を要するツバメの巣の採集作業は、降雨量の多い農閑期におこなわれていた。²⁵⁾

河川を無事に航行した次に人々を待ち受けているのは、危険な採集活動である。ツバメの巣は、洞窟の奥まった暗闇の中、ほぼ垂直に切り立つ岩肌を、心もとない細い足場と自分たちの身体だけを頼りに、何十メートルも登って作業しなければならない、まさに死と背中合わせの仕事の結果として得られる至高の品である。そしてそれだけに、長い場合には数カ月間にわたる採集キャンプに出発する前には、司祭 (*bəliau*) が死を招く悪霊 (*bəlih salong*) を取り除く儀礼が執りおこなわれたという。²⁶⁾

24) ブルック家による統治期およびイギリス植民地時代は、ブルネイとの領地の明確化や土地の開発計画のための測量地図作成機関であったと同時に、英国王立地理協会 (Royal Geographical Society) などとの共同学術調査もおこなってきた。現在では、サラワク州における先住民慣習権をめぐる土地闘争に対する土地登記や地図の作製などを主導している。

25) 現在では、近隣の国立公園における観光をはじめとする賃金労働に従事する村人が多く、観光業の繁忙期も考慮して採集時期が決められる。また、陸稲栽培に従事する世帯が年々減少する傾向にあり、採集活動は概して雨量の多い 12~3 月の間に集中する。陸稲栽培を継続している世帯でも、収穫期には親族の応援を呼ぶことで労働力を補填し、ツバメの巣の採集者だけ収穫作業をせずに洞窟へ採集に行くケースや、作付面積の縮小により世帯構成員のみで収穫を終えるケースなどがみられる。

26) 現在の LT 村において、教会で説かれる旧約聖書の天地創造説を除いて、もっとも支持されている (語られている) 起源神話は、すべての生きとし生けるものは創造主 (*bəlih ngaputong*) が創りだ

以上、口承史と資料に多くを負いながら、LT 村におけるツバメの巣の採集活動の様態を見てきた。一筋縄ではいかない生態環境的条件下で、他の生業活動と組み合わせながらツバメの巣を採集してきた LT 村は一方で、内陸部におけるマレー商人や華人商人らとの林産物交易の拠点であった。続く次節では、交易拠点が商人や港市とどのような関係にあったのかを具体的に見ていきたい。

2. 港市との関係 —— 交易拠点における殺人事件の事例

1882 年にバラム地域がブルック政府に割譲されるまでは、クムナ川 (the Kemena River) およびジュラロン川 (the Jelarong River) の最上流とティンジャール川の最上流がぶつかり合う分水嶺がブルネイ領とサラワク領とを隔てる国境の役割を果たしていた (図 1)。

1874 年、ブルネイ・スルタンの支配下で在地民にのしかかる重税やそれを徴収する横柄なマレー人土豪に業を煮やしたカヤン人とブラワン人を中心とした人々が、バラム河流域からスルタンの勢力を追いつくべく大規模な反乱をおこした。サラワク王国の 2 代目王チャールズ・ブルック (Charles Brooke; 在位期 1868~1917 年) はブルネイ・スルタンのこの危機を見逃さなかった。つまり、英領保護領となっていたブルネイからサラワク王国へ、バラム河流域の「合法的」な割譲に向けて動き出したのである。

チャールズ・ブルックはブルネイ統治下で在来民に課された重税やマレー人土豪による不当な価格で林産物交易、頻発する在地民集団間の首狩りを伴う戦闘行為と混乱を具体的に記述し、それを英国王室に報告する策として、ヒュー・ロウ (Hugh Brooke Low) を偵察旅行に遣わした。ラブアン (Labuan)²⁷⁾ を除いたボルネオ北部、すなわちスルー王国領地を含む、サラワク、ブルネイは、英国の強い影響下にあり、各地域の王が実際の統治をおこなう間接統治体制が敷かれていた。そのためブルックは、バラム地域やリンバン地域を自らの統治下に置くために、その正当な理由を添えて、ブルネイからの正式な土地の割譲を英国政府に申し出ることにしたのである。

バラム河流域の在地民らの反乱と後述するロウの暗躍により、1882 年 6 月 13 日、ブルネイ・スルタンはついにバラム地域をブルック家に割譲することを決め、チャールズ・ブルックは早速、マルディ (Marudi) に駐屯地を築いて支配の基盤を固めだした。そして、このバラム地域割譲の背景には、ロウが立ち寄った LT 村で起こった次の事件が重要な意味を持ってい

したというものである。そのため、耕作や居住のための森林の開墾をはじめ、何かを新しく始める時にはどこであろうと、祭司が創造主を呼び出し、創造主の要求に従い、また災害 (河川の浸食、大雨による冠水、火事など) があった時には高さ 1 メートル弱の祭壇 (*tapu*) を建てて創造主をなだめる儀礼をおこなってきた。

27) ラブアン島は 1846 年にブルネイのスルタンによって海賊征伐の代償としてイギリスに割譲され、イギリス直轄植民地 (Crown Colony) となった。

たのである。

1876 年、チャールズ・ブルックから使命を受けたロウは、現在のブルネイ領における南シナ海の河口からサラワクとの国境線沿いまで伸びるブライト川とトゥー川を經由してティンジャール川を最上流まで遡上して、ブルネイ領から当時のサラワク領のビントゥル地域へ入るという道程で旅をした。このロウが旅したルートは、ブルネイ王国のマレー人商人 (*Malay Nakoda*) がバラム河上流部の人々との林産物交易に利用していた「交易のハイウェイ」だった [Metcalf 2010: 124]。そして、この交易路上にあった LT 村が、定期的にブルネイからマレー人行商人、ラーマン (Nakoda Rahman) とその従者たちが訪れる拠点としてすでに機能していたことは、当時の官報を中心とする史料からも明らかである [SG 1876/7/17: 3-6; 1876/8/15: 4-6]。以下、官報に掲載されたロウの記録に基づいて、当時、LT 村で起きた事件の概要を説明する。

彼の旅行報告記事は官報の 1876 年 7 月号と 8 月号の 2 巻に分けて掲載され、²⁸⁾ その多くをこの事件の詳細な報告に割いていることから、ブルック政府が並々ならぬ関心を寄せていたことが表れている。

ブルネイ商人との交易に参加するのはロングハウスの首長層に限られていた。彼らが求めたのは、威信財としての真鍮品などの高価な品々であり、林産物との交換がおこなわれた。ツバメの巣や沈香の採集には数日から数カ月間のキャンプを必要とするため、商人たちの訪問時に、交換される高価な品々に見合う林産物が揃っていないことも珍しいことではなく、商人たちはいつも数日から数週間をロングハウスで過ごしていた。ブルネイ商人一行は、到着直後は威厳ある態度で村人に接し、他方のロングハウス住民も大切な客人として彼らをもてなすものだが、それも日が経つにつれてお互いの態度は砕けていった。最初の数日間は華々しく歓待がおこなわれたが、残った滞在日数の大半、彼らは横柄に食べ物を要求しながら林産物が集まるまで村人にプレッシャーをかけ続けていた。このように傍若無人に振る舞う商人たちと、それを煙たがる村人との居心地の悪い同居状態が続いていた [SG 1876/7/17: 5]。

だが、1876 年に旅の途中であったロウがこの村で遭遇したラーマンらとの交易は、いつもとはかなり違うものだった。ラーマンらが到着してから何日経っていたのだろうか、LT 村の首長層に属する人物が他界してしまったのである。今となってはその死因は知るすべもないが、突然の有力者の死に村全体は喪に服し、葬送儀礼の準備が速やかに執りおこなわれることとなった。キリスト教を信仰する者がまだいなかった当時、村人たちは慣習法 (*adât*) に従い、

28) ロウはその後、トゥー川を下り、マルディを經由してティンジャール川に航路を取って遡上して、分水嶺を越えて無事に当時のサラワク領ビントゥル地区へたどり着いた。このバラム地域の出来事を綴ったレポートがシブ地域の項目に掲載されているのは、彼がクチンに帰還する途中に投函したためであろう。

遺体を「テロレン」(*teloren*) と呼ばれる玉座のような死者のための特別な椅子に安置し、死者が生前に獲得したすべての装飾品で飾り立てた。とり乱して泣き叫ぶ女たちと神秘的な面持ちで平静を装う男たちが遺体を囲む、独特の雰囲気の中で着々と葬送儀礼が進むそのさなか、ラーマンの従者のひとりがそれを「非ムスリムのやり方」だと言ってロングハウス住民の前で嘲笑った。

この非礼は、村人を大いに傷つけ憤慨させた。なかでもこれに我慢ならなかったのが死者の甥だった。彼は山刀を取り出し、その場でこの無礼な従者を殺害した。嘲笑に怒りを禁じえなかった村人だが、殺害された従者というのが実は、内陸部ロングハウスに生を受けるもののブルネイ商人の奴隷にされた少年であった為、村人は殺害された少年に同情もした。そして何より、奴隷少年を殺めたという非はLT村の村人にあったことから、当時の村の首長、イプイ(Orang Kaya Panglima Ipui)はラーマン一行に対して、殺された少年を再びロングハウスの一員としてこの村に埋葬することに加え、合計で373カティ²⁹⁾(約186.5キログラムに相当)の銃(入手経路や所持数は不明)という多大な対価でラーマン一行に償うことを提案した。

しかし、事態はこれでは収まらなかった。より多くの罰金を徴収してブルネイ・スルタンにみずからの功績をアピールすることを画策した商人たちは、この提案では満足しないどころか、殺害された従者の復讐を企てたのである。商人ラーマンとその従者たちは、ロングハウスから離れた出作り小屋へ向かい、川岸でまったく不注意にたたずんでいた少年を惨殺するという蛮行にでた。ラーマン一行はその後すぐさま村から逃げ出したが、従者二人は村人が放った毒矢によってその命を絶たれた。交易と物流の拠点で起こったこの事件はすぐにバラム地域全体に知れ渡り、これまでのブルネイ・スルタンがバラム地域の人々に課していた人頭税や交易税などの重税に加えて、ブルネイ商人への鬱積した不満³⁰⁾も後押しして、村人およびバラム地域の住人の、収めようがないほどの怒りを買うこととなった。そしてこれを契機に、LT村はブルネイとの交易の断絶を決意した。

では、偶発的な事件を契機とするものとはいえ、ブルネイの後背地として繁栄してきたはずのLT村が、どうしてブルネイとの交易をやめることができたのだろうか。ブルネイとの交易断絶が交易拠点としての村の存続に決定的な影響を与えないのだとしたら、彼らにはブルネイとの交易以外にも交易ルートの選択肢があったということを示唆している。すなわち、内陸部

29) 「カティ」(*katty*) は、東南アジアを中心に広く海洋交易に用いられていた重さの単位である。1カティはおよそ500グラムに相当する。

30) 官報の記事では具体的に言及されていないが、在地民がブルネイ・マレー商人に抱いていた不満は主に、ブルネイ商人のネットワークの中で取引するために彼らへ手数料と税を支払わなければならないことだという。そして結果的に、資源採集者たちにとってマレー人商人の買い取り価格よりも、マルディヤミリを拠点にしている華人たちから提示される価格の方が魅力的なものとなり、ブルネイ・マレー商人は市場を奪われていくことになった [Cleary 1996: 309]。

の交易拠点は決して港市に完全に統制されていたわけではなく、むしろ彼らは、地域の政治事情に鑑み、状況に応じて交易相手や港市を選択することができた時代状況が間接的に示されているのである。³¹⁾

ロウの報告がどれほどの影響力があったのかを推し量ることはできないが、1882年にはバラム地域、続いて1890年にはリンバン地域がブルネイからサラワクに割譲された。以後、交易相手や港市の選択肢があったLT村の交易相手はブルネイからサラワクへと方向転換することになった。

この事件は、次の重要な情報も伝えている。まず、交易拠点ロングハウスにおいて、実際に商人たちとの交易をおこなうのは、首長層に限定されていたということである。次に、大量の火器（火縄銃）がこのロングハウスに備蓄されており、戦闘力（あるいは戦闘のための動員力）とそれを手に入れる財力がこの村にはあったということである。

つまり、LT村のもつ戦闘力や周囲の在地民コミュニティや港市に対する政治的、経済的な影響力は、ブルネイ・スルタン統治期末期にはすでに、為政者にとって無視できない程度に強化していたのである。そこで次章以降、その基盤として林産物の河川交易ネットワークがどのように張り巡らされ、機能していたのかを検討していく。

V 河川交易ネットワーク

1. 富を運ぶ華人商人

ブルネイ・スルトンの領土を着実に統治下に編入してきたブルック政府は次第に、ブルネイ・スルタンに仕えるマレー人商人やサラワクで影響力を持っていたマレー人土豪を内陸部の林産物交易から排除し、替わって、華人商人たちの商業活動を奨励してサラワク内の河川交易網を整備していった [Ooi 1997: 95]。ブルック政府は、交易中継地も整備した。中でもマルディは、ラジャン河流域のカピット (Kapit)、ブラガ (Belaga) と同じく、サラワク王国の歳入確保を目的として現地民の林産物採集を奨励していたブルック政府が提供した、林産物集積所と交易の拠点である [ibid.: 88] (図1)。ここには、福州人をはじめ、潮州人や福建人などの華人商人たちが次々と拠点となる商店を築き、上流域への交易活動を活発に展開していた。この地域が林産物交易のフロンティアだったことは、バラム地域がサラワクに割譲されたわずか3年後の1885年の時点で、マルディのパザールには既に45軒もの林産物を扱う華人商店が

31) 少なくとも、沿岸部と直接つながっているわけではなかった彼らが採りうる選択肢は、西方のサラワク王国と東方の山脈を越えたところにあるクタイ王国の2つが考えられる。加えて、内陸部の住民が状況に応じて交易相手や港市を選択することは、東南アジアでは珍しいことではなかった [e.g. Colombijn 2003; 太田 2014: 第5章]。

軒を連ねていたという官報の記録 [SG 1885/8/1] からもうかがえる。

この河川交易のネットワークを考察する際、LT 村の場所が、この川をボートによるアクセスが比較的容易な河川と、並みの船頭では航行不可能な河川とに二分する分岐点であったことは、ここで再度強調しておかなければならない。LT 村が市場に提供してきた主要林産物資源は、ツバメの巣やグアノなど、華人社会の需要に応える資源に偏りが見られる。これは、内陸部の林産物交易におけるブルネイ・マレー人商人との交易断絶とマルディを拠点とする華人商人の台頭という、流域を超えたよりマクロな情勢が、内陸部交易の拠点のひとつであった LT 村にダイレクトに影響したと考えられるだろう。

事実、マルディを拠点にしていた華人行商人は林産物を上流から下流のバザールまで流通させるのに不可欠な役割を果たしてきた [Chew 1990: 80-82]。しかし同時に、村人から買い取った林産物、そしてそれと引き換えに手渡す鉄や布などの日用品や中国製の壺などの威信財、あるいは現金を積む行商人の船は、格好の襲撃の対象でもあった。³²⁾ マルディから LT 村までひとつの河川でつながっているとはいえ、その移動距離は 100 キロメートルほどある。その距離を無事に往復し終えるためには、直接移動にかかる経費に加えて、強力な護衛を雇っていた可能性も考慮すると、一度の行商に莫大な経費がかかっていたことが想像できよう。

人々が多大なエネルギーを投入してきた林産物の河川交易を媒介にして LT 村は、内陸に暮らす人々にとって、威信財や生活必需品を入手する機会と、普段は会うことのない人々が一堂に会して様々な情報を交換することのできる場所を提供していたのである。次節以降、LT 村が貴重な品々と情報が飛び交う内陸の交易拠点だったことを、さらに掘り下げてみていく。

2. 親族紐帯の網

利害を共有するロングハウス、あるいは遊動民たちが同盟 (alliance) を結ぶことは、珍しいことではないが、こうした同盟はふとしたことから容易に決裂しかねない危うさを含み持っている。同盟関係をより強固で確実にするのが親族縁組であった。内陸部における林産物の略奪行為は、華人行商人だけではなく林産物交易に関わるすべての人々にとって脅威であり続けてきたことは、当時の官報が伝えるとおりである。たとえば、1884 年 3 月 6 日には、数人のイバン人が、LT 村の大首長ミアン氏 (Orang Kaya Tumanggong [*sic.*] Mian) の傘下に属するプナン人からグッタペルカを奪い逃走したことが記されている [SG 1884/6/2]。視界を遮る

32) 内陸部交易における交易品目に関する目録等の史料は残されておらず、官報やホースとマクドガル [Hose and McDugall 1912] など探検記録の記述情報に依拠している。こうした史料に記載されている交易品としての鉄は山刀や農具に使用するためのものであり、火器や弾薬が内陸部でどのように流通していたかについて、詳しくは言及されていない。しかし、先に述べたようなブルネイからのマレー商人と LT 村の一件にみるように、LT 村には火器 (火縄銃) の備蓄があった。そのため、交易ルートを通してこれら火器や弾薬も運搬されてきたものと考えられる。

もののない河川上を行き来する行商人の船が、略奪行為と無縁であったはずはない。このような状況下において、可能な限り奥地まで商品を買いつけに来る彼らの行商活動を安全に遂行させることは、林産物の採集者であり、売り手である内陸部の人々にとっても肝要な勘案事項であった。つまり、トゥトー川沿いのロングハウスが協力して、富の運び手である華人商人を保護することは、彼らの利に大いにかなうことでもあるのである。

同時に、ブルック政府にとっても、河川を交通通路として機能させることは特別な意味を持っていた。なぜなら、トゥトー川が河川交易ネットワークとして機能しなければ、内陸部の林産物は下流の交易都市まで届かずブルネイなど周囲の港市へと流れてしまい、海洋貿易による国家歳入の増大が見込めないからである。³³⁾ つまり、マレー人商人がパラム地域で行商しなくとも、これはブルックが最も警戒していた事態である。

そこで以下に、LT 村と周囲のロングハウスとの親族関係が河川交易ネットワークの形成にいかに関与していたかを具体的に検証していきたい。

LT 村では、パラム河本流とトゥトー川の合流地点に位置するロング・キプット村と、トゥトー川沿いに位置するバトゥ・ベラ村³⁴⁾との間の通婚・婚姻は、当時、村内では珍しいことではなかった。これは、現在の LT 村でおこなった系譜調査においても、父方、母方を問わず、この両村どちらかに出自を有する人物が系譜に含まれている例が散見されたことから裏付けられる(図 5)。同時に、ここに示した 6 代前から現在までの系譜図には、信仰の異なる 2 つの系譜から交互に村の首長を輩出してきた経緯と、³⁵⁾ 首長層の系譜にロング・キプット村や比較的新しいロングハウスであるロング・パナイ村(Long Panai)などの同水系のロングハウスの首長層との婚姻関係が示されている。

この親族縁組の網が結びつける河川航路からは、日用品(布や鉄製品)とは別に、政治経済的に優位な立場に立つ指導者たちは、威信財としての中国製の壺や婚姻儀礼で不可欠なゴングなども入手していた。このような親族ネットワークを生み出す縁組は、トゥトー川流域の特殊事例ではなく、古くはサラワク西部のラジャン河流域でも内陸部の村落間で戦略的におこなわ

33) 実際に、このような事態が起きていたこと、それに対するブルック政府の危機感が官報に記録されている [SG 1883/3/1: 26]。

34) バトゥ・ベラ村は移動史と神話を共有するブラワン系のロングハウス・コミュニティの中で最後に LT 村の祖先と分裂したとされている。

35) 1950 年代頃から LT 村の人々のなかには、キリスト教(ボルネオ福音協会; Sidan Injir Borneo [SIB])や土着精霊信仰とキリスト教の教義を掛け合わせた新興カルトであるブンガン教(Bungan Cult)に改宗する人がはじめ、1970 年代にはほぼ全員が SIB 改宗していた。ロングハウス内のキリスト教改宗者の増加は、当時、村を二分するほどの影響力を持っていた。官報の記録によると、旧ロング・テラワン村は政府の指導に反して、ロングハウスをわざわざ 2 つに分けて建て直している [SG 1956/11/30: 293]。ひとつは、キリスト教(SIB)に改宗した行政首長とその支持者たちが住むためのもので、もうひとつは、ブンガン教やそれ以前の「創造主」の存在を重んじる土着精霊信仰を捨てることを拒む地域首長や呪術師、そしてその支持者たちのロングハウスだった(図 5)。

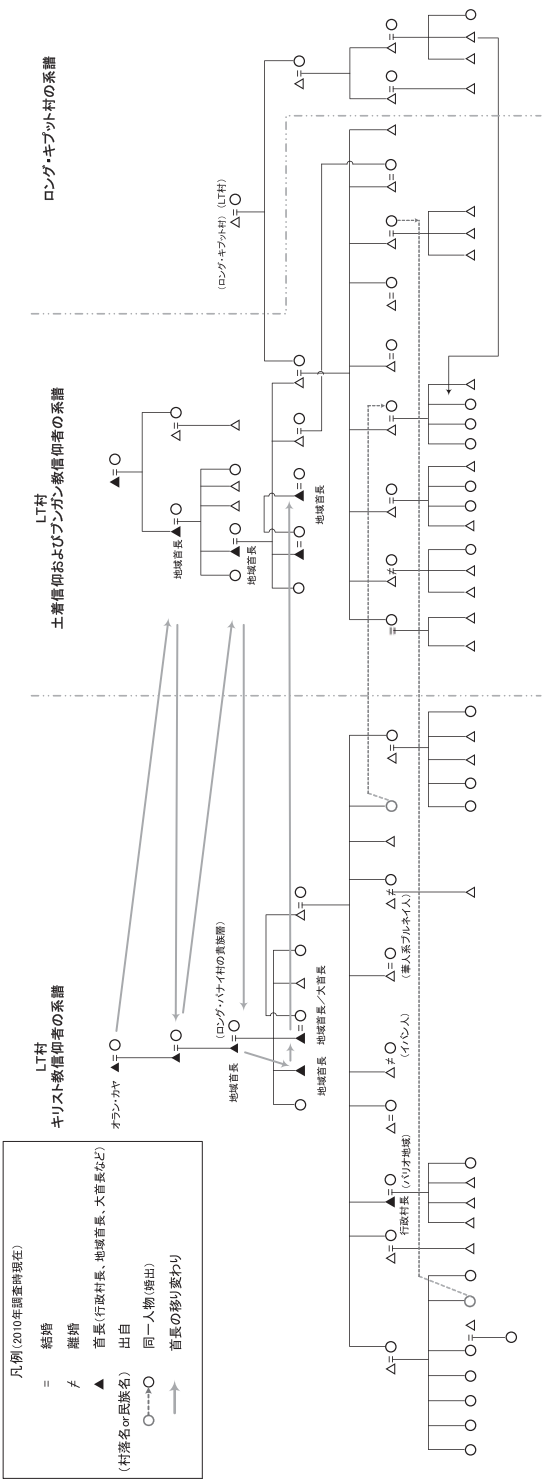


図5 ロング・テラワン村の首長層の系譜図

出所：聞き取りをもとに筆者作成

れていたことが、サラワク王国 2 代目王チャールズ・ブルックや他の行政官によって記録されている [C. A. Brooke 1866: 70, 271-272; Hose and McDougall 1912: Vol. I, 74-75]。

LT 村の出身者を中心とした親族関係は、村とマルディ間にも広がっていたわけではなく、LT 村より内陸部のコミュニティとの間にも広がっていた。

LT 村から洞窟へ行く途中にあるトゥトー川とその支流メリナウ川 (the Melinau River) との分岐点では、遊動民プナン (Penan) との間で定期的にタム (*tamu*) と呼ばれる林産物交易市が開かれていた。タムとは、内陸部の遊動民 (とりわけプナン人) に対して、ロングハウス住民との間でおこなわれていた林産物等の物々交換における遊動民に不利な取引を是正するために、ブルック政府から派遣された地方行政官などが立ち会い取引を監督する林産物交易市である [Langub 1984]。³⁶⁾

タムでの定期的な遊動民との交流に加えて、人類学者ケディットは、サラワクがマレーシアという新興国民国家の一部になる 1960 年代半ばまでは、LT 村はプナン人にとってもっとも身近な出稼ぎ先のひとつとなっていたことを報告している [Kedit 1982: 255]。ケディットが、当時の若いプナンによくみられた例として、あるプナン人男性の職歴として記録しているのは次のようなものである。4 年間リンバンの伐採キャンプ、ゴム採取、家屋の建築の仕事を転々とした後、2 年間 LT 村に住み込んでブラワンの農作業を手伝い、続いて数カ月アポー川沿いの伐採キャンプで働き、その後約 3 週間キリスト教教会に滞在して聖書の読解を学習した。こうして「外の世界」で出稼ぎをした彼は、再び森のなかでの遊動生活にもどっていったという。さらに、メトカーフによると、一部のプナンは政治的に支配的立場にあった LT 村の庇護下に入り、なかにはそのまま婚姻を経て同化する者もいたという [Metcalf 1982: 50-51]。

内陸部のロングハウス・コミュニティとの親族関係はどうだろう。筆者が配偶者と使用言語についておこなった悉皆調査 [佐久間 2015] では、既往の言語学研究が示す通り [e. g. Blust 1984; Hudson 1978], LT 村のブラワン語は他のブラワン系諸語を話す村と異なり、トリン語 (クラビット系言語) の影響が強く認められる。³⁷⁾ 他方こうした研究において、この言語状況は、19 世紀末に LT 村がトリン人らを庇護下においたためたと説明されてきたが、交易による継続的な交流と婚姻による側面も影響していると考えられる。

36) タムは、遊動プナン人とのその近隣のロングハウス・コミュニティとの間でおこなわれる、独特の交易システムである。最初のタムは、おそらくチャールズ・ブルックの時代におこなわれるようになったと考えられるが、1960 年代以降、徐々に衰退し、1976 年バラム地区 (Baram district) おこなわれたのを最後に、プナン人とロングハウス間のタムは消滅した [Langub 1984: 12]。また時に、医療関係者がタムに向かう地方行政官に同行して、プナン人やロングハウスを訪問して健康状態を調べることもあった [e. g. SG 1956/11/30: 292]。

37) 脚注 18 も参照のこと。

例えば、クラビット人の口承伝承をまとめた記録 [Bala 2012] から、バリオ高地 (Bario Highland) やロング・ルラン村 (Long Lellang)、ロング・セリダン村 (Long Seridan) のクラビット人たちも、水路や陸路を伝ってはるばる遠方から集まってきていたことはほぼ間違いない。行商を目当てにやってきたクラビット人は、バリオ高地から産出された良質の岩塩と引き換えに、³⁸⁾ 葉や鉄製の鍋を受け取ることが多かったという。

以上にみてきたように、内陸部において、河川交易における後背地社会の交易拠点のロングハウスを中心に華人商人の行商ネットワークと在地民との親族ネットワークが絡まりあう社会空間が形成されてきたのである。

VI 結 語

本稿では、19 世紀末から 20 世紀中葉までのサラワク北部を舞台に河川交易が内陸地域の秩序を編成してきた様態を、口承伝承と歴史資料を織り合わせて考察してきた。ここで見たように、本稿で焦点をあてたロングハウス・コミュニティ (LT 村) は、サラワク王国に組み込まれる以前、ブルネイ・スルタンの影響下にあった時代のトゥトー川流域において、河口部の港市と内陸部を接続する交易・物流の拠点として台頭してきた。この交易・物流ロングハウスの立地をいま改めて思い起こされたい (図 2)。それは、ブルネイ王国とサラワク王国を隔てる分水嶺であると同時に、アクセス困難な上流部と航行しやすい下流部との結節点であった。最後に、先行研究に対する本稿の意義を確認して結びとしたい。

まず、交易を通して外界 (周囲の村、商人、港市、為政者) と後背地の連動の様態を捉えることが可能になる点である。歴史資料の乏しい後背地社会は、港市分析を中心とする歴史研究からは、外界や為政者からの強大な影響力に対して単に受動的に対応を迫られる対象として看過されてきた。しかしながら、歴史資料の中でも貿易統計以外の記録には、断片的ではあるが、当時の様子の人間味あふれる記述が残されている。こうした史料とフィールド調査で収集した伝承や系譜を織り合わせることで、外界から後背地におよぶ各種の影響力と、交易拠点を中心とした地域社会を編成して港市や為政者と交渉してきた後背地社会の歴史の動態が明らかとなった。

次に、本稿のもうひとつの意義として、LT 村を中心とした後背地の地域社会におけるロングハウス住民と遊動民、そして後背地と港市の関係を、限定的で不可逆的な従属の関係とはみならず、より柔軟な選択の余地があったことを指摘し、空間的なネットワークとして提示した

38) 塩は大変な貴重品であった。それに加えて、バリオ高地の塩は質がいいことで有名であり、古くから重要な交易品だった [Bala 2012]。

点が挙げられよう。内陸部は交易一次産品を提供するだけの存在なのではなく、拠点的なロングハウスとその周囲に点在するロングハウス・コミュニティや遊動民たちとを結ぶ交易ネットワークを編みあげていた。このネットワークに乗って港市を経由して行商人が内陸部の拠点ロングハウスに鉄器や陶器、布などをもたらし、ツバメの巣などの一次産品はそれらと逆方向に動くことによって、集配の分岐点にある集落と、交易を統括する首長の勢力は強化されてきた。

LT 村は、豊富な林産物資源を蓄える森林と、歴代の為政者や東南アジア海域世界を結びつけてきた河川交易網の最上流の拠点だったといえる。ブルネイ・スルタンやブルック家が統治してきたサラワクの国家歳入源である海洋交易を支えてきた要因は、港市や官製の交易中継拠点だけにのみ求められるわけではない。さらには、内陸部の河川交易と、その交易拠点村が地域社会において在地社会と為政者を切り結ぶ「在地の長」として存在していたことが大きかった。これは、従来のボルネオ人類学では描かれてこなかった内陸部社会の再考をうながしているといえるだろう。すなわち、LT 村を特殊例とみるのではなく、ボルネオの他の内陸地域においても、交易、集権化を異なる視角から歴史的に考察することで、東南アジア海域の歴史と関連や他地域との比較分析が可能となるだろう。

謝 辞

本論文は、2009 年度松下国際スカラシップ（現松下幸之助国際スカラシップ）からの留学助成、および日本学術振興会特別研究員の研究奨励費（課題番号 11J03205）の助成による成果の一部です。また、本稿で使用した『サラワク官報』は、2010～14 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（基盤 S、課題番号 22221010）の一環として収集・デジタル化されたものをご提供いただきました。最後に、査読者の先生方からは貴重なコメントを賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

参 考 文 献

日本語文献

- 石川 登. 2008. 『境界の社会史 —— 国家が所有を宣言するとき』（地域研究叢書 17）京都：京都大学学術出版会.
- 西島 薫. 2015. 「ボルネオ・イバン人のリーダーシップに関する一考察」『アジア・アフリカ地域研究』15(1): 49-70.
- 大木 昌. 1981. 「19 世紀スマトラ中・南部における河川交易 —— 東南アジアの貿易構造に関する一視角」『東南アジア研究』18(4): 612-642.
- 小野林太郎. 2011. 『海域世界の地域研究』（地域研究叢書 24）京都：京都大学学術出版会.
- 太田 淳. 2014. 『近世東南アジア世界の変容 —— グローバル経済とジャワ島地域社会』名古屋：名古屋大学出版会.
- 佐久間香子. 2014. 「『生』を満たす活動としての狩猟 —— ボルネオ内陸部における現在の『森の民』に関する一考察」『地理学論集』89(1): 45-55.
- . 2015. 『中央ボルネオにおける内陸交易拠点の歴史的形成と変化』博士学位論文、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科.
- 篠田 統. 1970. 「燕高」『日本歴史』260: 167-172.

- 杉島敬志. 2014. 「東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論」『複ゲーム状況の人類学——東南アジアにおける構想と実践』杉島敬志（編），331-364 ページ所収. 東京：風響社.
- 富沢寿勇. 2003. 『王権儀礼と国家——現代マレー社会における政治文化の範型』東京：東京大学出版会.

外国語文献

- Bala, Sagau Batu. 2012. *Kelabits' Story: The Great Transition*. Singapore: TraffordSG.
- Baring-Gould, S.; and Bampfylde, C. A. 1909. *A History of Sarawak under Its Two White Rajahs, 1839-1908*. Singapore: Oxford University Press.
- Blussé, Leonard. 1991. In Praise of Commodities: An Essay on the Crosscultural Trade in Edible Bird's-Nest. In *Emporia, Commodities and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, c. 1400-1750*, edited by Roderich Ptak and Dietmar Rothermund, pp. 317-335. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Blust, Robert. 1984. The Tring Dialect of Long Terawan. *Sarawak Museum Journal* 18(54): 101-135.
- Bock, Carl. 1881. *The Head-hunters of Borneo: A Narrative of Travel Up the Mahakam and Down the Barito; Also Journeying in Sumatra*. London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington.
- Bronson, Bennet. 1977. Exchange at the Upstream and Downstream Ends: Notes toward a Functional Model of the Coastal State in Southeast Asia. In *Economic Exchange and Social Interaction in Southeast Asia: Perspectives from Prehistory, History, and Ethnography*, edited by Karl L. Hutterer, pp. 39-52. Michigan: University of Michigan.
- Brooke, Charles A. 1866. *Ten Years in Sarawak*. 2 vols. London: Tinsley.
- Brooke, James. 1838. Proposed Exploring Expedition to the Asiatic Archipelago. *Journal of the Royal Geographical Society* 8: 443-448.
- Chew, Daniel. 1990. *Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier, 1841-1941*. Singapore and New York: Oxford University Press.
- Chiang, Bien. 2011. Market Place, Labor Input, and Relation of Production in Sarawak's Edible Birds Nest Trade. In *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*, edited by Eric Tagliacozzo and Wen-Chin Chang, pp. 407-431. Durham and London: Duke University Press.
- Cleary, M. C. 1996. Indigenous Trade and European Economic Intervention in North-West Borneo c. 1860-1930. *Modern Asian Studies* 30(2): 301-324.
- Colombijn, Freek. 2003. The Volatile State in Southeast Asia: Evidence from Sumatra, 1600-1800. *The Journal of Asian Studies* 62(2): 497-529.
- Fox, James; and Sather, Clifford. 1996. *Origin, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. Canberra: Australian National University.
- Hobbs, Joseph J. 2004. Problems in the Harvest of Edible Birds' Nests in Sarawak and Sabah, Malaysian Borneo. *Biodiversity & Conservation* 13(12): 2209-2226.
- Hose, Charles; and McDougall, William. 1912. *The Pagan Tribes of Borneo*. 2 vols. London: Macmillan.
- Hudson, A. B. 1978. Linguistic Relation among Bornean Peoples with Special Reference to Sarawak: An Interim Report. In *Sarawak: Linguistics and Development Problems*, edited by M. D. Zamora, V. H. Sutlive, and N. Altshuler, pp. 1-44. Williamsburg: Boswell.
- Ik, Tien Ngu. 2011. Global Trade and Political Continuity: The Rise of Timber Tycoons in Sarawak, 1945-1963. *Südostasien Working Papers* 42. Online at <https://iaaw.hu-berlin.de/southeastasia/history/publications/pdf/soa-wp-042-global-trade-and-political-continuity-the-rise-of-timber-tycoons-in-sarawak-1945-1963-ik-tien-ngu.pdf/>. アクセス日 2014 年 8 月 3 日.
- Ismail, Mohamded Yusoff. 1999. Social Control and Bird's Nest Harvesting among the Idahan: A Preliminary Observation. *South East Asian Studies* 37(1): 3-17.
- Kedit, Peter. 1982. An Ecological Survey of the Penan. *Sarawak Museum Journal (Special Issue No. 2)* 30(51): 225-279.
- King, Victor T. 1993. *The People of Borneo (The Peoples of South-East Asia and the Pacific)*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Knapen, Han. 2001. *Forests of Fortune? The Environmental History of Southeast Borneo, 1600-1880*. Leiden: KITLV Press.

- Langub, Jayl. 1984. TAMU: Barter Trade between Penan and Their Neighbors. *Sarawak Gazette* 110 (1485): 11–15.
- Larsen, Ib. 2012. The First Sultan of Sarawak and His Links to Brunei and the Sambas Dynasty, 1599–1826: A Little-known Pre-Brooke History. *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* 85(2): 1–16.
- Lim, Chan Koon; and Earl of Cranbrook. 2002. *Swiftlet of Borneo: Builders of Edible Nests*. Kota Kinabalu: Natural History Publication.
- Magenda, Burhan Djabier. 2010. *East Kalimantan: The Decline of a Commercial Aristocracy*. Jakarta: Equinox Publishing.
- McWilliam, Andrew. 2002. *Paths of Origin, Gates of Life: A Study of Place and Precedence in Southwest Timor*. Leiden: KITLV Press.
- Metcalf, Peter. 1974. The Baram District: A Survey of Kenyah, Kayan, and Penan Peoples. *Sarawak Museum Journal* 22(43): 29–41.
- . 1976. Who are the Berawan? *Oceania* 47: 85–105.
- . 1982. *A Borneo Journey into Death: Berawan Eschatology from Its Rituals*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- . 1992. Aban Jau's Boast. *Representations* 37: 136–150.
- . 2010. *The Life of the Longhouse: An Archaeology of Ethnicity*. New York: Cambridge University Press.
- Mizushima, Tsukasa; Souza, George Bryan; and Flynn, Dennis O., eds. 2014. *Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*. Leiden: Brill.
- Nevins, Joseph; and Peluso, Nancy Lee. 2008. *Taking Southeast Asia to Market: Commodities, Nature, and People in the Neoliberal Age*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Nicholl, Robert, ed. [1975]1990. *European Sources for the History of the Sultanate of Brunei in the Sixteenth Century*. 2nd ed. Bandar Seri Begawan, Brunei: Brunei Museum.
- Ooi, Keat Gin. 1997. *Of Free Trade and Native Interests: The Brookes and the Economic Development of Sarawak, 1841–1941*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Osmaston, Henry A.; and Sweeting, Marjorie M. 1982. Geomorphology. *Sarawak Museum Journal (Special Issue No. 2)* 30(51): 73–93.
- Peluso, Nancy L. 1983. Markets and Merchants: The Forest Products Trade of East Kalimantan in Historical Perspective. MSc Thesis, Cornell University.
- Pringle, Robert. 1970. *Rajahs and Rebels: The Iban of Sarawak under Brooke Rule, 1841–1941*. Ithaca: Cornell University Press.
- Ptak, Roderich. 1992. The Northern Trade Route to the Spice Islands: South China Sea-Sulu Zone-North Moluccas (14th to Early 16th Century). *Archipel* 43(1): 27–56.
- Reid, Anthony. 1988/93. *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450–1680*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.
- Rousseau, Jérôme. 1979. Kayan Stratification. *Man* 14(2): 215–236.
- . 1990. *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. New York: Clarendon Press Oxford.
- . 1998. *Kayan Religion: Ritual Life and Religious Reform in Central Borneo*. Leiden: KITLV Press.
- Schouten, M. J. C. 1998. *Leadership and Social Mobility in a Southeast Asian Society: Minahasa, 1677–1983*. Leiden: KITLV Press.
- Sellato, Bernard. 2001. *Forest, Resources and People in Bulungan: Elements for a History of Settlement, Trade, and Social Dynamics in Borneo, 1880–2000*. Bogor: CIDOR.
- Sercombe, Peter; and Sellato, Bernard. 2007. *Beyond the Green Myth: Borneo's Hunter-Gathers in the Twenty-First Century*. Copenhagen: NIAS.
- Shahack-Gross, Ruth *et al.* 2004. Batu Guano and Preservation of Archaeological Remains in Cave Sites. *Journal of Archaeological Science* 31: 1259–1272.

- St. John, Spenser. 1862. *Life in the Forests of the Far East*. 2 vols. London: Smith Elder.
- Tagliacozzo, Eric. 2005. *Secret Trades, Porous Borders: Smuggling and States along a Southeast Asian Frontier, 1865–1915*. New Haven and London: Yale University Press.
- Tsing, Anna Lowenhaupt. 1993. *In the Realm of the Diamond Queen: Marginality in an Out-of-the-way Place*. Princeton: Princeton University Press.
- Van Leur, Jacob Cornelis. 1955. *Indonesian Trade and Society: Essays in Asian Social and Economic History*. Hague: W. Van Hoeve Publishers.
- Vischer, Michael P., ed. 2009. *Precedence: Social Differentiation in the Austronesian World*. Canberra: ANU Press.
- Walker, J. H. 2002. *Power and Prowess: The Origins of Brooke Kingship in Sarawak*. Crows Nest: Asian Studies Association of Australia in association with Allen & Unwin and University of Hawaii Press.
- Warren, James Francis. [1981] 2007. *The Sulu Zone, 1768–1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: NUS Press.
- Wolters, Oliver William. 1982. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Zeppel, H. 2006. *Indigenous Ecotourism: Sustainable Development and Management*. Wallingford, Oxfordshire: CABI International.

サラワク官報

1876. July 17th. Sibu Report by Hugh Brooke Low, pp. 3–6.
1876. August 15th. Sibu Report by Hugh Brooke Low, pp. 4–6.
1882. December 1st. Baram District Report by C. C. De Crespigny, p. 104.
1883. March 1st. Baram District Report by C. C. De Crespigny, p. 26.
1884. June 2nd. Baram District Report by C. C. De Crespigny, pp. 55–56.
1884. July 1st. Baram Official Journal 1884. p. 75.
1885. August 1st. Baram District Report by C. C. De Crespigny, p. 72.
1885. September 1st. Baram District Report by C. C. De Crespigny, p. 83.
1885. November 2nd. Baram District Report by C. C. De Crespigny, p. 105.
1949. May 7th. Baram District, by G. A. T. Shaw, p. 120.
1956. November 30th. Native Affairs by I. A. N. Urquhart, pp. 292–294.
1983. April 1st. Adventure up Batang Baram and Gunung Mulu by Land and Survey Department, pp. 8–10.

(掲載決定 2016 年 10 月 12 日)